

令和 6 年 6 月 2 日現在

機関番号：24405

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00649

研究課題名（和文）古文辞学派を中心とする近世漢学言語論の日本語学史的 research

研究課題名（英文）A historical study of Japanese linguistics in the classical Chinese studies in Edo era with a focus on the Kobunji school

研究代表者

山東 功 (Santo, Isao)

大阪公立大学・大学院現代システム科学研究科 ・教授

研究者番号：10326241

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、これまで日本儒学史・漢文学の分野において中心的に扱われてきた、近世漢学者の研究について、日本語に関する言及を精査することにより、近世日本における日本語研究のあり方を、国学に偏頗することなく総合的に把握することを目的とし、具体的には、古文辞学派を打ち立てた荻生徂徠と、太宰春台、堀景山、市川鶴鳴といった徂徠以後の門流や関係者の言語研究に関して、日本語への言及をもとに考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、一方的な実用的立論に陥りがちであった研究史を、より浩瀚な研究分野として再構成し得るものとなり得る。しかも、言語思想史的背景を重視するという日本語学的方法論を採用することにより、言語学的にも偏りのない穏当な記述が期待でき、その意義も大きいものと思われる。こうした学説史研究は、今日における日本語研究に対する自覚的な反省と、今後への展望を与えるものである。また、国際的にも、英国のヘンリー・スウィート学会の存在にも見られるように、文化史や思想史をふまえた言語学史研究については、日本語研究の分野においても、ますます重要性を帯びてくるものと指摘できよう。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to gain a general understanding of the state of Japanese language studies in early modern Japan, without being partial to Kokugaku, by closely examining references to the Japanese language in the studies of early modern Chinese scholars, which have been the main focus of Confucian studies and Chinese literature in Japan. Specifically, it was examined the language studies of the founding fathers of the Ko-bunji-gakuha(school), namely, from the perspective of references to the Japanese language, as well as the language studies of the followers and associates of the school after founding fathers such as Ogyu Sorai, Dazai Shundai, Hori Keizan, and Ichikawa Kakumei.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語学史 漢学言語論 古文辞学派 荻生徂徠 太宰春台

1. 研究開始当初の背景

明治後期以降に成立した、国語学の歴史としての「国語学史」の編述において、近世儒学(漢学)の研究成果については、それほど重要視されてこなかった。例えば1899(明治32)年刊行の保科孝一『国語学小史』における「第二期の国語学 国語学勃興の時代」の記述では、一応、貝原益軒、荻生徂徠、太宰純(春台)について言及がなされるものの、中心となるは契沖、荷田春満、岡部(賀茂)真淵、谷川士清、富士谷成章、本居宣長、といった国学(和学)者である。日本語研究という立場からすれば、国学の言語研究がもたらした成果の重要性は言うまでもないが、一方で、国学の延長としての国語学という観点が醸成されていった点も否定できない。事実、『国語学小史』には、荷田春満について「語学上の研究としては、別に格別なものはありませんが、国学の復興に尽力いたしました功労は、決して没すべからざるものであると思ひます」(p.128)と高い評価が与えられている。語学上の研究で格別なものがない者を取り上げる意味は、まさに、国学の継承と展開にこそ存在したのである。結果として、国学とは異なる学知に関しては、それが国学にどのような影響を与えたという、いわば主従の関係として国語学史が理解されていくことになる。このことを最も象徴的に示したのが、時枝誠記の国語学史研究である。時枝は国語学史を「国語意識の展開の歴史」と捉えたが、そうした場合、儒学(漢学)や蘭学といった学知のような、国語意識とは直接繋がらないものについて、その研究成果を取り上げることが極めて困難なものとなってくる。具体的には、漢文訓読や漢字(文字・音韻)・漢文法等の研究の中で示された、日本語に対する言及がこれに該当する。

そもそも、近世において「日本語学」といった明確な研究分野が存在しなかった以上、それぞれの学知における日本語への言及について、当時の思潮(政治・経済・文化思想史的背景)をふまえて、総体として研究史的に把握することによって、近世における日本語研究とは何であったのかを理解すべきであろう。質・量ともに比肩ない国学の言語研究が重視されることは当然ではあるものの、そのことと他の学知を過小に評価することは別問題である。特に近年の日本思想史研究分野において、国学と儒学(漢学)、さらには蘭学との相互影響関係が大いに注目される中、一方の学知を偏重する形で研究史を把握することは、大きな問題点を孕んでいるように思われる。

2. 研究の目的

研究開始当初の背景から関するに、学知の相互関係といった捉え方に関係して、近世日本の言語研究を見ていくに及び、これらを思想史的「言語論」として把握し、その学的成立過程から「漢学(儒学)」の言語論、「国学(和学)」の言語論、「蘭学」の言語論というように三者を並置し、それぞれの思想史的特質とその言語研究のあり方を関連付けて検討する必要があるものと思量される。とりわけ、近世学知の中心は儒学であり、仮に、漢詩文の制作や訓読に限定したとしても、漢籍を通じて学問を形成する「漢学」としてのあり方は、近世における教学体系の根幹でもあった。

こうしたことから、本研究はこれまで日本儒学史や近世漢文学の分野において中心的に扱われてきた、近世儒学者のテキスト(刊本・写本、書簡等)について、日本語に関する言及を精査することにより、近世日本における日本語研究のあり方を、国学に偏頗することなく総体的に把握することを目的とするものである。なお、儒学のあり方については、中国において展開された儒学と、その日本における受容とでは意味内容が異なる場合も存在するため、日本における儒学・漢文学を担う主体を示す用語として、本研究では「漢学」の語を用いる。

3. 研究の方法

明代古文辞運動の影響のもと、古文辞学派(護園学派)と称される学派を打ち立てた荻生徂徠と、太宰春台、堀景山、市川鶴鳴といった徂徠の門流や徂徠の影響を受けた漢学者の言語研究について明らかにするとともに、言語観をめぐる古文辞学派と国学との関係について、日本語への言及をもとに考察を行う。また、荻生徂徠や太宰春台に関連して、古文辞学派には連ならないものの、伊藤東涯の『操觚字訣』や皆川淇園の『助字詳解』等といった著述について、漢文訓読法の展開という観点とともに、言語思想史的背景や日本語観について比較検討を行う。

本研究は、時枝誠記の主張した「国語意識の史的展開」としての「国語学史」という枠組みを超え、近世儒家の思想史的背景とともに、当時における学知の根幹であったとも言える漢学において、とりわけ古文辞学における古文辞(運動)・清朝考証学との影響関係という、東アジア儒学思想史・対外交渉史的研究を念頭においた、古文辞学派漢学者の言語論についての、日本語学史的考察と位置付けられる。さらには、明治以降の影響関係をも視野に置くことにより、国語学という近代学知の成立を問うことにも繋がる。

4. 研究成果

(1) 古文辞学派の漢文訓読論について

荻生徂徠が『訓訳示蒙』において述べた「助八倭歌ノテニヲ八也」という言のように、漢学に

において見出された日本語の意味について、漢文訓読批判の文脈を踏まえつつ検討を行った。具体的には、『弁道』で示された「後世の人は古文辞を識らず。故に今言を以て古言を視る。」という言語観が、逆に「今言」に対する精緻な言語感覚を招来する契機となり、特に日本語助辞の研究を推進する意味をもった点について検討した。同様に、太宰春台が『倭読要領』において「倭語ハテニヲハヲ以テ辞ヲ属ル、テニヲハトイフハ、上下ノツナギナリ」と説明したように、漢文訓読で重要な「テニヲハ」が、近世国学言語論へどのような交渉をもったのかについても検討を行った。また徂徠の下で、太宰春台といった経学的漢学者の著述に見られる言語観が、服部南郭や山県周南といった他の古文辞派漢学者とどのような関係にあるのかについて、古文辞学派の学統問題の再構成を前提に考察を試みた。さらに、古文辞学派の漢文訓読論と対比する形で、伊藤東涯『操觚字訣』や皆川淇園『実字解』『虚字解』『助字詳解』について、品詞分類法の比較をそれぞれ行うことで、中国における「実字・虚字」の二分類法や、「実字・虚字・助字」の三分類法が、階層的な四分類法として採用されていることの意味について、鈴木胤『言語四種論』をふまえつつ、日本語学史的考察を行った。

(2) 古文辞学派の音韻論について

南京音を「天下ノ正音」(『倭読要領』)とした太宰春台が、倭音(呉音・漢音)を「訛舛」と捉えたように、古文辞学派漢学者の漢字音認識が招来した音韻論研究について、華音における「正・誤」の意味を踏まえて検討を行った。また、荻生徂徠とも親交の深かった岡島冠山の唐語研究と古文辞学派との影響関係や言語観の比較をさらに、古文辞学派の音韻論の継承を見る上で、折衷学派漢学者である太田全斎の『漢呉音図』における古文辞学派の影響の有無に関して、「図徴凡例」における五十音図の解説等を通して、その意味について考察を行った。

3. 古文辞学派と国学との関係について

本居宣長の国学研究において、古文辞学に深い見識を示した漢学者、堀景山の影響が見られることは夙に知られているが、景山自身についての研究成果については、高橋俊和(2017)『堀景山伝考』が目につく程度である。しかも、堀景山伝世本『日本書紀』における歌註書入や、随筆『不尽言』における言語論について、本格的な分析を行ったものはほとんどないと言える状態であった。また、活用研究に極めて優れた業績を残した鈴木胤も、古文辞学派漢学者市川鶴鳴の弟子であるが、鶴鳴については、『まがのひれ』をめぐる国儒論争にのみが注目され、『大学』註釈に見える言語論等はほとんど言及されなかった。古文辞学派の特徴は、古言と今言との懸隔を捉える言語観にあり、古文辞学派漢学者の多くはこの点について、何らかの言及をしている。これを無視する形で国学を捉えることは、国学が自立的に展開したとする恣意的な理解に陥る恐れがある。本研究では、上述の堀景山、市川鶴鳴等の著述に見られる言語論と、国学者の学問形成に与えた影響について書誌学的検討からはじめ、最終的には言語思想史的考察を行った。特に『不尽言』については写本が多く、日野龍夫校注『新日本古典文学大系』所収本以外の、未流として退けられた写本についても、細部において検討を要することから、古文辞学派漢学者と国学者との影響関係について、著述内容の比較検討により対照一覧を示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山東 功	4. 巻 16
2. 論文標題 図で表された言葉の「形」 近世日本における日本語形態論の系譜について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 形の文化研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山東 功	4. 巻 17
2. 論文標題 近世漢学言語論と日本語学史	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人間科学	6. 最初と最後の頁 43-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山東 功	4. 巻 30
2. 論文標題 「体・用」の別と修飾	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 百舌鳥国文	6. 最初と最後の頁 237-256
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山東 功	4. 巻 7
2. 論文標題 「心学」の発見 石門心学はどう伝えられたのか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 こころをみがく 石門心学文集	6. 最初と最後の頁 93-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山東 功	4. 巻 96-5
2. 論文標題 近代文法用語の成立と学校国文法 「順接・逆説」をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 144-157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山東 功	4. 巻 39-1
2. 論文標題 時枝誠記	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 34-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山東功
2. 発表標題 図で表された言葉の「形」 近世日本における日本語形態論の系譜について
3. 学会等名 形の文化会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山東 功
2. 発表標題 仁田義雄氏の発表をうけて 日本語学の構築（シンポジウム「社会変動の中の日本語研究 学の樹立と展開」）
3. 学会等名 日本語学会2019年度秋季大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 国語語彙史研究会編、蜂矢真郷他、全16名	4. 発行年 2023年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 319
3. 書名 国語語彙史の研究 四十二	

1. 著者名 鈴木 健一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 355
3. 書名 明治の教養：変容する「和」「漢」「洋」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------